

学生海外調査研究	
バレエ振付・演出家小牧正英の背景に関する研究～ハルビン居留時代～	
糟谷 里美	比較社会文化学専攻
期間	2010年8月19日～2010年8月22日
場所	中華人民共和国 黒龍江省 ハルビン市
施設	モデルン・ホテル、ソフィスカヤ寺院、ハルビン市建築芸術館分館

## 内容報告

### 1. 海外調査研究の必然性

学位論文における研究テーマは、「日本バレエ史上、職能集団形成において小牧正英が果たした役割に関する研究」である。小牧正英（1911 - 2006）は、戦前ハルビンにおいてロシアのバレエ教育を受け、＜上海バレエ・ルッス＞で第一舞踊手として活躍した後、戦後日本にバレエを持ち帰り、多くの全幕作品を紹介し、その活動を通じて日本全国にバレエを普及した人物である。筆者はこれまで、小牧の戦後の活動に焦点をあて、その芸術活動を概観してきた（糟谷、2009）が、それだけでは小牧の活動の真髄に触れることにはならず、戦前のハルビンや上海での活動をつぶさに検討していくことが必須の課題として残された。そこで筆者は戦前の小牧の活動に関する資料収集を行なったが、日本国内に存在する資料の一部は、その信憑性が十分であるとは言えず、現地でのさらなる調査が必要となった。

### 2. 海外調査研究の目的と意義

本調査は、戦前小牧が受けたハルビンでのバレエ教育に着目し、国内では入手困難な資料収集を図ることを目的とした。

筆者は昨年度より小牧の戦前の活動について調査研究をすすめてきた。その結果、どの先行研究も小牧正英のハルビン居留時代については、小牧の著作に依拠した記述となっており、その信憑性が不十分であることがわかった。小牧の著書には、＜ハルビン音楽バレエ学校＞の当時のレッスンの様子や恩師に関することなどが記されている。しかし、1930年代、バレエ学校がどのような環境の中で運営されていたか、また小牧がどのような環境のもとでバレエを学んだかについてはほとんど言及されていない。したがって、現地調査においてこれらに関する資料を収集し、国内の＜東京小牧バレエ団＞において収集された新聞記事や写真等を照らし合わせながら、小牧のハルビン居留時代の様相について明らかにし

ていくことが課題である。これにより、これまで明らかにされてこなかったプロのダンサーになる以前の小牧の活動を辿るという点に意義を有すると考える。

### 3. 海外調査研究の成果

本稿では、事前調査の結果を踏まえながら、現地調査で得られた成果を報告する。

#### 3.1 モデルン劇場とモデルン・ホテル

“モデルン劇場”という名は、小牧の著作や記事の中に多数出現する。小牧はバレエ学校時代に「レオ・ドノーレ（ЛЕО Д' ОНОРЭ）」という芸名でこの劇場の舞台に立ち、卒業公演もこの劇場で行っていたことは事前調査で明らかであった。（小牧、1975、p. 32、pp. 154-155/小牧、松島、1979、p. 96/山川、1995、pp. 87-88）したがって、この劇場が当時どのようなものであったかを知ることは、小牧のハルビンでの活動の一端を知る上で重要であると考え、現地調査を行なった。

中国黒龍江省のハルビンは、帝政ロシアによって、東清鉄道（岩野、1999、p. 27）の敷設や教会の設立を中心として、近代都市へと大きな変貌を遂げ、1924（大正13年）には中国東北部のハルビンのロシア人は、約10万人に達していたという。（函館日文化交流史研究会、2002、p. 2）帝政ロシアは、ハルビンにヨーロッパ風文化をそのまま移植するため、アールヌーボー様式、バロック様式、ビザンチン様式などの欧風建築物を次々と建設し、オペラやバレエの上演や舞踏会などのできるホール等も設けた。その1つが“モデルン劇場”である。

1930年代、「時代の流れで観客を映画に奪われ街には常演劇場はなくなった」（毎日新聞社、1980、p. 123）というものの、小牧によれば、モデルン劇場はホテルやレストランも備え、ハルビンの社交の中心として、オペラやバレエ、演奏会などを催していた。（小牧、1975、p. 155）また、モデルン劇場は、“ロシア

キネマ館”という映画館も備えており、1930年代かなりの数の映画を上映していたという。(長谷川、1936、p. 234)

写真1 (中央大街) 0016



<モデルン・ホテルのある中央大街>

本調査で訪れた“モデルン・ホテル(馬迭爾賓館)”は、1906年(明治39年)ユダヤ系ロシア人によって開業されたものである。ハルビン駅の北側に位置する大通り“中央大街(旧キタイスカヤ)”のほぼ中央にあり、アールヌーボー様式の建物である。

事前調査では、モデルン・ホテルとモデルン劇場が同じ建物であることを示す文献は見当たらなかった。しかし、現存するモデルン・ホテルと“モデルン劇場”と記された1930年代の写真(毎日新聞社、1980、p. 123)とを照合したところ一致が認められたため、同一の建物であることが判明した。モデルン劇場は、当時“ハルビンの銀座”と称せられ商業中心地となっていたキタイスカヤ(長谷川、1936、p. 126)という大通りにあったことになる。現在劇場は存在せず、宿泊施設とレストランをもつ建物となっている。

写真2 (モデルン・ホテル) 0026



<モデルン・ホテル>

ホテル内にはモデルン劇場で踊ったバレリーナの写真が展示されていた。そこに記されていた文言には、「バレエ界の新しいスター、ニーナ・コゼヴニコワ(注1)は、ハルビン時代モデルン・ホテルで踊り、その後1940年代上海で大いに活躍した」(注2)とあった。ハルビン市内には、1930年代のバレエに関する写真資料が7枚残されていたが、そのうち個人名で紹介されているダンサーは、ニーナ・コゼヴニコワとグラッフゾフ(Graffzoff)の2名であった。ニーナ・コゼヴニコワがハルビンにおいて著名なバレリーナであったことが推察される。

ニーナ・コゼヴニコワは、小牧のバレエ学校時代の同級生で、小牧の<上海バレエ・ルッス>招聘に尽力した人物であった。(小牧、1977、p. 31)モデルン・ホテル所蔵のニーナ・コゼヴニコワの写真説明には、戦後オーストラリアに移住したことが記されている。(注3) <東京小牧バレエ団>団長の菊池宗氏(インタビュー、2010年4月)によれば、小牧は<上海バレエ・ルッス>解散(1945)後、オーストラリアへの渡航を考えていた。ニーナ・コゼヴニコワも含め<上海バレエ・ルッス>時代の仲間は、戦後オーストラリアに移り住んだものも数名おり(小牧、1984、p. 62)、さらに小牧は戦後の日本への引き揚げを「旅行のつもりで帰ってきた」(小牧、1979、p. 124)と述べていることから、小牧のオーストラリアへの移住計画の可能性が示唆される。

### 3.2 1930年代のロシア人社会と文化

山川によれば、小牧が通っていたバレエ学校は、ロシア人のための学校であった。(山川、1995、p. 76)また小牧は、バレエ学校時代ロシア人のアレクサンドラル・シャモフスキの家に寄宿していた。(小牧、1979、p. 8)このことから、小牧は日本の管轄化にあったハルビンにおいて、ロシア人社会の中で生活していたことは明らかであり、1900年(明治33年)から1930年代のロシア人の社会と文化を調査することは、小牧がどのような環境の中でバレエを学んだかを知る手がかりとなるだろう。

戦後ロシア人の撤退したハルビンは、1965年(昭和40年)から1975年(昭和50年)に起こった文化大革命によって、戦前の遺産(ハルビン駅舎や中央寺院等)が取り壊されるなど大打撃を受けた。辛うじて残されてきた古い建造物は、現在重要文化財として登録がすすめられている。しかし町並みは一部の地域を除いて、高層ビル建築、幹線道路敷設など都市計画がかなりすすめられていたため、当時の様子を現場で知ることは難しいと考えられた。したがって、本調査では1900年(明治33年)から戦前までのロシア人の様子を伝える写真を多く保存している2つの施設、すなわちソフィスカヤ寺院(ハルビン市芸術建築館)およびハルビン市芸術建築館(旧ユダヤ教礼拝堂)を訪れ、当時の様子を調査した。

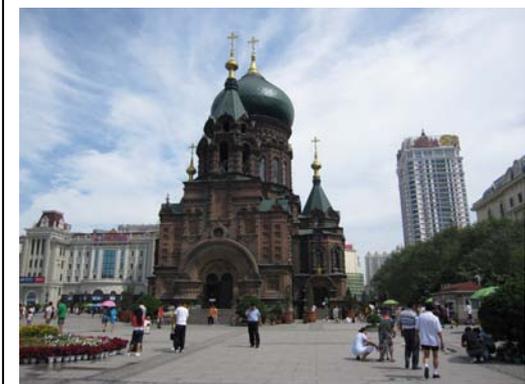
### 3.2.1 白系ロシア人の社会

ロシア革命後、1920年（大正9年）にシベリアの白系（注4）政府が倒れたため、数万人の白系ロシア人が満州に移住し、それ以降この地は「世界で唯一、白系ロシア人が政治的・経済的な基盤を保っていた。」（岩野、1999、pp. 34-35）

1907年（明治40年）に創設されたロシア正教会の“ソフィスカヤ寺院”は、ビザンチン様式建築のハルビンを代表する欧風建築物で、現在ハルビン市芸術建築館となっている。ここには、ハルビンでのロシア人の姿を伝える古い写真が多く展示されていた。

白系ロシア人の生活は、帝政ロシア時代の営みを保守しており、白系ロシア人専用の小学校や中学校を持ち（長谷川、1936、p. 282）、音楽学校等も帝政ロシア時代のシステムを採用していた。（函館日文化交流史研究会、2002、p. 4）彼らは主に新市街（ノーヴィゴード）（注5）というハルビン駅の南側の高台に住んでいた。この地区は、サポール（中央寺院）（注6）というロシア人が最も信仰したハルビン最古の教会を中心につくられた街で、当時中国人の居住が禁じられ、通行さえも制限されていた。「道路建物共に整然とし緑樹は美しく繁り、哈爾濱市中最も整った市街」（長谷川、1936、p. 125）であり、領事館等の官公庁と住宅街が共存していた。展示資料からは、彼らが松花江（スنگアリー）という河の中洲である“太陽島”に別荘をもち（注7）、春夏秋冬の余暇を楽しんでいた様子がうかがえた。

写真3（ソフィスカヤ寺院）0136



<ソフィスカヤ寺院（ハルビン市建築芸術館）>

### 3.2.2 ユダヤ系ロシア人の社会

帝政ロシアの領土拡大政策によって、ロシア人となったユダヤ人（以下ユダヤ系ロシア人と記す）は、ユダヤ教の弾圧や「ボグロム」と呼ばれる組織的な略奪や虐殺などから逃れて1882年（明治15年）から1914年（大正3年）にかけて、200万人がアメリカに移住した。そして、「19世紀末に清国から満州を

獲得したロシア皇帝ニコライ二世は、ユダヤ人をヨーロッパから追放すると同時に、満州を西欧化することをもくろんで、『満州へのユダヤ人移住者には信教の自由を許す』と布告」（岩野、1999、p. 27）したため、1万人以上のユダヤ系ロシア人がハルビンを中心とする満州に移り住んだ。ハルビンの外国人商店の8割ほどがユダヤ系ロシア人による経営であったとする言説もあり（岩野、1999、p. 28）、戦前のハルビン経済は、彼らによって支えられていたといえる。

現在ハルビン市建築芸術館分館となっている旧ユダヤ教礼拝堂（1918年設立）には、ハルビンにおけるユダヤ系ロシア人社会の足跡を伝える多くの写真が残されている。これらの資料から、ユダヤ系ロシア人が商業的な成功のほか、学校や病院、養老院の設立・運営等を中心とする教育・慈善活動にも力を入れていたことがうかがえる。また展示資料からは、子供の音楽教育に強く関心がもたれ、特にピアノ教育が多く取り入れられていたこともわかった。1920年（大正9年）には、ハルビン第一音楽学校がユダヤ系ロシア人によって設立され、音楽家になるための専門教育も本格的に行なうようになった。岩野は、「ロシアのユダヤ人にとって、音楽家になることは、“自由への道”につながっていたからである」（岩野、1999、p. 29）としている。

写真4（ハルビン市建築芸術館分館）0088



<ハルビン市建築芸術館分館>

### 3.2.3 1930年代のロシア人の文化

1917年（大正6年）に起こったロシア革命は、革命を逃れた多くの芸術家を流出させ、ハルビンにも白系ロシア人とユダヤ系ロシア人を中心とする一流の芸術家たちが押し寄せた。1920年代には、「東支倶楽部」（注8）によって、オーケストラやオペラ、バレエなどが数多く上演され、ハルビンの音楽文化が最高潮に達していた。（岩野、1999、p. 35）1930年代、日本が中国東北部を掌握し、ソ連国籍取得者の帰還がはじまり、ハルビンにおけるロシア人人口は減少した。ルスナク・スヴェトラナによると、終戦時

までハルビンには、22 のロシア正教会があり、医学や技術関係の高等教育機関は 13、農業などの研究所が 9、「帝政ロシア時代の教育方式に則った音楽院（3 校）、バレエ学校（2 校）、そして、市民が誇る『ハルビン交響楽団』（団員約 60 人）があった」（函館日口交流史研究会、2002、p. 4）という。したがって、1930 年代、社会情勢が変化しつつも、ロシア人の社会と文化は継続していたと考えられる。

ソフィスカヤ寺院には、3 つの音楽学校（1921 年、1924 年、1927 年に設立）に関する資料が展示されており、ロシア人の音楽教育に対する熱心さがうかがえる。

小牧はハルビンで生活をはじめてすぐにロシア人にピアノとロシア語を学んでいる。（山川、1995、pp. 73-74）長谷川によれば、「元来ロシア人は、音楽好きな人間である為、ハルビンには立派な音楽家が相當に居た」（長谷川、1936、p. 290）という。小牧が個人教師にピアノを学べたのも、多くの音楽家がハルビンにいたことと、ロシア人の芸術教育の意識の高さゆえだったと思われる。

### 3.3 ハルビン音楽バレエ学校

ソフィスカヤ寺院には、1930 年代のバレエ学校の様子を伝える写真が 1 枚だけ展示されていた。その写真には、「1930 年代はじめ、アンドレーヴァによってハルビンに創立されたバレエ学校では、著名なバレリーナを養成した」（注 9）と付記されていた。小牧によれば、彼の通っていたバレエ学校には、キャトコフスカヤ担当のクラスとアンドレーヴァ担当のクラスがあった。（小牧、1975、p. 31）このことから、この写真のバレエ学校は、小牧の通っていた「ハルビン音楽バレエ学校」であることが明らかである。

また、この写真が前述のルスナク・スヴェトラナの言説中にある 3 つの音楽院と考えられる音楽学校に関する写真資料とともに展示されていたことから、アンドレーヴァのバレエ学校が同言説のバレエ学校のうちの 1 つで、帝政ロシア時代のシステムの学校であったことが推察される。長谷川の調査では、当時の学校は満州人、日本人、ソ連人、白系ロシア人の学校に区分されていた。（長谷川、1936、p. 282）したがって、このバレエ学校は、山川の述べる通り、ロシア人ための学校であったことがわかる。

また小牧によれば「ハルビン音楽バレエ学校」は、新市街（南崗）にあった。（小牧、松島、1979、p. 95）新市街は、前述の通りロシア人が生活した街である。小牧が生活も学校もロシア人に囲まれた環境の中で営んできたことから、小牧がハルビンにおいて受容したことは、日本人にとっての外来の文化である単品としてのバレエではなく、ロシア人のもつ文化の一部としてのバレエ、言い換えれば帝政ロシア時代の人々の生活そのものであったといえる。

## 4. 今後の展望

今回の海外調査では、小牧のハルビン居留時代の様相を探るため、①モデルン劇場 ②ソフィスカヤ寺院 ③ハルビン市建築芸術館分館において調査を行なった。その結果、これまで不明確だったモデルン劇場について、〈ハルビン音楽バレエ学校〉について、さらに小牧の生活環境についての情報が得られた。これらのことをその後に展開される小牧の上海での活動にどのように結びつけ考察を深めていくかが今後の課題である。

本調査で得られた知見は、小牧の戦前の中国での活動としてまとめ、戦後の小牧の芸術活動との結びつきの中で、どのような意味の礎となっているかを考察した上で、テーマ「小牧正英・バレエマスターへの序章」として『舞踊学』（舞踊学会）に投稿する予定である。

戦前社会情勢が複雑な時代にあつて、あえて外国人社会の中に身を置きながら、外国文化であるバレエを享受していった小牧正英は、現代にも通じるグローバルな視点をもつ数少ない日本人であり、彼の戦後の芸術活動にその視座がどのように反映されていくかを見ていくことは、現代の国際的学際的な研究のあり方にも示唆を与えるだろう。

## 注

- 日本語表記は、小牧の著作では「ニーナ・コゼヴニコワ」となっている。（『ペトルウシユカの独白』1975、p.30）露語表記は、「Нинтой Кожевниковой」あるいは「Нинтой Кожевникова」などがみられる。（1943 年の上海の露語新聞）また、上海の英字新聞にみられる英語表記は、「Nina Kojevnikova」であるが、写真に付記されたローマ字は「Nina Crofnikova」とあつた。しかし、これは中国語表記「克热芙尼科娃」を発音してこのように表記されていると思われる。英字新聞の表記が正しいと考える。
- 原文（英語）は、次のとおりである。「The new ballet star Nina Crofnikova in Harbin performed in Modern Hotel, who was employed by Shanghai in 1940s and was popular for a period of time, and then migrated to Australia.”
- 注 2 の原文参照。
- 1917 年（大正 6 年）のロシア革命の際に、革命を支援する「赤系」に対し、皇帝を支援する反革命派を「白系」といった。
- またの名を「南崗(ナガノ)」という。
- この教会は、文化大革命（1965-1975）によって取り壊され、現存していない。
- 1957 年（昭和 32 年）の松花江の氾濫による洪水で、ほとんどの別荘が流されてしまい、現在ではハルビン最大の公園“太陽島公園”となっている。
- 1910 年（明治 43 年）に建設された「ハルビン東清倶楽部」は、オペラやコンサート、舞踏会のできる大ホールと、図書館やレストラン、バー、ビリヤード室などを備

えた鉄道従業員のための慰安施設で、1920年代には「東支倶楽部」と改名されている。(岩野、1999、pp.23-27)

9. 原文(中国語)は、次のとおりである。「三十年代初、哈尔滨創辦了安德列耶娃芭蕾舞学校、培養了大批著名的芭蕾舞演員。」また、著名なバレリーナとは、ニーナ・コゼブニコワであると推察される。

#### 参考文献

岩野裕一(1999)『王道楽土の交響楽』音楽之友社  
糟谷里美(2009)「戦後の日本バレエ史における小牧正英の位置付けに関する考察 ―戦後から昭和末期を中心に―」  
『昭和音楽大学研究紀要』28、pp.63-71  
小牧正英(1977)『バレエと私の戦後史』毎日新聞社

小牧正英(1979)『ペトルウシュカの独白』三恵書房  
小牧正英、松島正幸(1979)「小牧正英を圍繞するもの 連続対談 2 おゝ、ハルビン」『The TES Graphic Ballet & Dance』3-4・5、テスカルチャーセンター出版部、pp.94-97  
小牧正英(1984)『舞踊家の汗の中から 晴れた空に…』未来社  
函館日ロ交流史研究会(2002)『会報』20  
長谷川治編集(1936)『X A P B И H 1936』哈爾濱印刷所出版部  
毎日新聞社(1980)『別冊 一億人の昭和史 日本植民地史(4) 続・満州』  
山川三太(1995)『白鳥の湖伝説』無明舎

かすや さとみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻